



識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする新連載。第一回目は筆者が出会ったある英国人のお話です。

全英オープンを大きく 発展させた元軍人の働き。

1977年12月、ゴルフの聖地セント・アンドリュースにあるR&A（ゴルフの世界的な総本山として知られる英国のゴルフ倶楽部）の、入り口に掲げられた真鍮プレート「Gentlemen Only」の付いたドアを叩いたのが、私のゴルフビジネスの始まりでした。

R&Aの事務官を務めていたキース・マッケンジー氏に、時の弊社テレ・プランニング社長、藤田敦からの手紙を届けに行くだけの仕事でした。当時のクラブハウスは、メンバー以外の人間は入る事を許されない歴史ある建物で、ドアマンの私に對する冷たい視線は今でも忘れられません。

R&Aの事務官とは、当時の全英オープンを全て取り仕切っていたトップのポジションで、マッケンジー氏の振る舞いは古き良き大英帝国の元軍人（実際に戦地に行ってきた経験も……）であり、昼食に水なしのジン・トニックを飲んでいたので印象的でした。

60年代の全英オープンといえば、歴史の浅い米国のマスターズやPGAツアーに人気を奪われており、米国からの選手の参加も少ない状況。マッケンジー氏はそれを何とか立ち直らせようと、ロイヤルダッチシェル石油のマーケティング部からヘッドハントされてきた方だったのです。

全英オープンは、66年英国の

ミアフィールド大会までは場内看板も許可していない飾り気のないものでした。マッケン

ジー氏は、67年英国のホイレック大会から、それまでプレスルーム内に黒板で表示されていただけのスコアボードを、現在のような形で大型スコアボードを導入したほか、商品の展示施設など新たな試みに着手しました。今で言うホスピタリティ施設の始まりですね。スポンサーを付けて、観客動員にも一役を買った彼は、全英オープンをメジャーイベントに仲間入りさせた、立役者の一人でした。

Vol.1

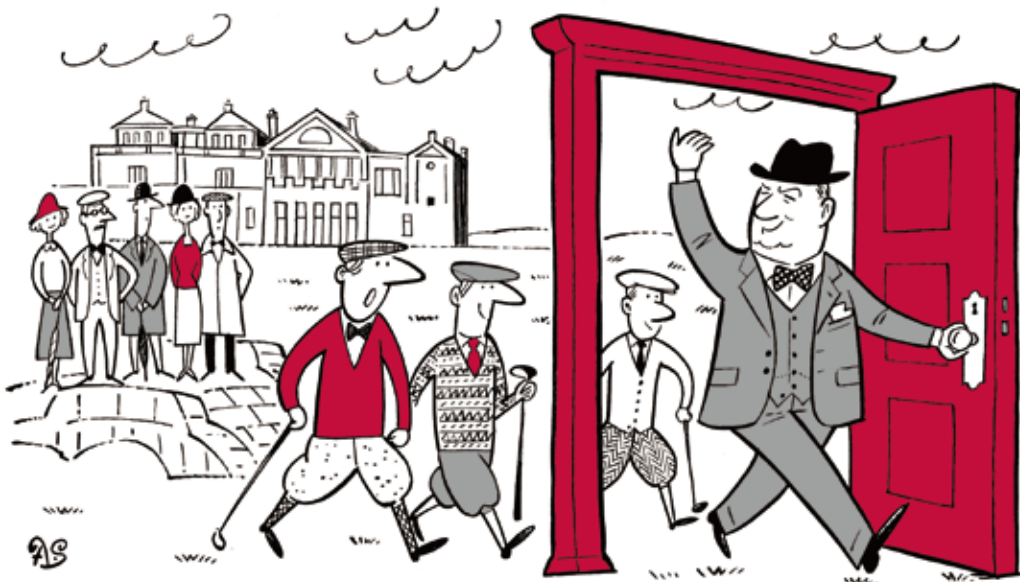
メジャー大会の裏方のお話

口癖は「心配するな」という マッケンジー氏の強い心。

人の良さそうな外見とは真逆で、マッケンジー氏は筋を通して自らの意見をストレートに言う方でした。しゃがまれていて低い独特な声が耳に残っています。今思えば、映像で見たチャールズ氏（英国の元首相）の雰囲気とでも表現出来るかもしれません。私の質問に対しては「心配するな……」と言うのが癖でした。

全英オープンを世界最高のトーナメントにするため、テレビの視聴者にアピールするのに必要な米国人のプレーヤーになんとか参加してもらおうと、84年の退職までマスターズにも毎年訪れ、選手たちに直接話をしていました。さらに日本からの記者や我々のリクエストに答えて、ホテルを用意して迎えてく

ゴルフの世界を 動かした チャーチル似事務官の ブレない心



れたのには感激しました。かなり独断で話を決めてしまつて、部下のフォローが大変だったと周囲から後日聞きました。アジアにも大会を広めようという姿勢を見ると、彼のような裏方のブレない考えと努力が歴史を動かした、ゴルフを未来へと発展させていたのだと感じます。

創業当初、弊社は全てのメジャートーナメントの日本における放映権を保有しており、主催者側との交渉に奔走していました。本拠地を米国に移した78年から、私は全英オープン、全米オープン、マスターズなどをフォローし、特にマスターズは78年大会から36年間連続して現地で立ち会っています。

思い起こすうちに、懐旧の情に駆られてきましたが……今回より、世界各国で、ゴルフの仕事だけではなく現地での様々なやり取りを通じて体験してきた経験をもち、この連載を綴っていきたいと思います。世界のゴルフ文化の違い、その面白さを少しでも感じてもらいたければ幸いです。

ゴルフビジネスの プロフェッショナル

神野方仁（じんの・みちひと）
1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary
www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

